

沖縄県医師会理事退任にあたって

前沖縄県医師会 副会長

(公益社団法人 北部地区医師会 北部地区医師会病院) 宮里 達也



令和6年6月20日の代議員会をもって沖縄県医師会の理事職を退任することになった。8年間の在職中、役職員をはじめ多くの方々に大変お世話になった。本当にありがとうございました。

振り返りますと私は、平成28年6月に北部地区医師会から推薦をいただき新理事に選出された。当時、県医師会会長は長年会長をお勤めなさった故宮城信雄会長から安里哲好会長に代わった年であった。3人の先生方が乱立した会長選挙後であったため少し不安であったが、新会長の安里哲好会長は公平な会運営を行い心配は杞憂であった。

着任後私は、安里会長から常任理事に指名された。2年後の平成30年には私がB会員であるにもかかわらず異例の副会長をお願いされた。安里会長からは行政経験を生かして必要な助言をしていただきたいとのことであった。本当にありがたいことであった。

安里会長の会運営の基本理念は『県民の命を守る』ことであった。沖縄県民の健康状況を考えてみるに、健康に気を付け長寿を全うする人が少ない反面、健康には全く無頓着で不健康な生活を続け早世する人も多いことが分かっていった。安里会長は『働き世代の健康状況改善』を県医師会の主活動方針とした。このことはとても重要なことであるが未だ道半ばである。田名新会長にはぜひこの活動を力強く引き継いでいただきたい。

そもそも私が県医師会理事に就く主な目的は公立沖縄北部医療センターを実現したいと思ったからであった。北部の基幹病院構想は中部病

院長の宮城良充先生からの提案であった。その構想を私がリードして実現するようお願いされ市民運動が始まったのであった。その考えは容易に北部住民から支持をされた。しかし、労働組合の強い反対などがあり、なかなか進展しなかった。そこで北部市町村と一緒に署名活動を行うとともに大規模市民集会を開催した。そのことをもって県に対し新病院の早期建設を強く求めた。署名活動の際は県医師会も協力していただき15万筆の署名が集まった。また市民集会には安里会長を先頭に県医師会の方々も駆けつけていただき約3,200人の参加する集会となり大成功であった。その様な北部住民の強い要望があり県知事もようやく公立沖縄北部医療センター設立を決断したのであった。

私が行った県或いは日本政府関係者への新病院設立の要請活動においては、県医師会理事の肩書は大いに役立った。私を県医師会理事に登用していただいた先生方、特に安里会長には改めてお礼申し上げます。皆様ご存じのように新病院の移転地も決まり現在実施設計が進んでいて令和10年には新病院が完成し運用される予定となっている。

さて、新病院建設には約444億円の巨費が必要である。政府からは、現時点約100億円の支援が得られることが決まっている。その獲得に際し安里会長の強力なお力添えがあった。このことはこの投稿文を通してはっきりと記録に残しておきたい。

国からの予算獲得に際しては次のことも忘れてはならない。琉球大学医学部・病院は沖縄県の振興計画に位置付けられ、西普天間基地の返

還跡地に建設が進んでいる。ところが折悪しく資材費等の高騰にかち合い、約 100 億円の資金不足となった。ところが県はほとんどこの事に無関心で大学は困り果てた。そのため医師会に相談があった。安里会長を先頭に地元国会議員の宮崎先生や自見大臣また武見大臣に特段のご配慮をお願いし、どうにか予算を確保できた。会員の皆様にはこのことも是非ともわかっていただきたい。

さて私の在任中、全く予期しないことが発生した。COVID-19 のパンデミックである。中国の情報が伝えられた直後の理事会で県医師会内に対策本部が立ち上がった。理事者の先生方から、平成 21 年の H1N1 パンデミックの経験のある私が担当理事として指名された。

私は理事会等で次のようなお話をしたことを記憶している。新しい流行病は人々に恐怖を発生させる。そのことで社会的パニックが起こることが予想される。しかし、医療者はそういった人々の恐怖心に引きずられることなく、常に冷静であるべきである。感染症の歴史は、人々の根拠なき恐怖によって被害の拡大をもたらしたことを記録している。一方、感染症流行は医療人の矜持によって提供される医療の力によって乗り越えてきた。解決の力となるのは人々の特に医療人の誠実さによっているのである。

今回も、私が懸念したように人々に恐怖を発生させた。そのことに煽られたのか過度の主張を行う医療人もいた。「ロックダウンして県外からの人の流入を完全になくすべきだ。」県医師会にはそういった主張も届いた。しかし、安里会長を先頭に、県医師会はそういった極端な声に引きずられることなく終始冷静に対応した。

また、専門職の会としてマスコミを活用して県民にメッセージした。その際、時期と内容を十分吟味しておこなった。最終的に県医師会は流行状況に応じて 15 回の県民へのメッセージを行ったが、流行曲線とメッセージの関係を示した図は、県医師会のメッセージは県民の理解が得られたことをはっきり示している。

今回、理事職を離れるに際し若い先生方に次のことを話しておきたい。「感染症においては感染力と致死率は反比例の関係にある」勿論、私には明確な証拠を示すことはできない。しかし、少なくとも私の経験からはそう言える。致死率の高い SARS やエボラが大流行に至らなかったのはそのようなことが関係していると私は考えている。いずれにしろ人々の感染症への恐怖は医療の力によってしか乗り越えることができない。

最後に重要なことなのでさらに付け加えるに、私が県庁在職中に故宮城信雄会長とともに確認しあった理念のことをお話しておきたい。『県内には大学病院、県立などの公立病院、民間病院、診療所など多様な医療機関がある。それぞれがその責任を果たしつつ連携し、あたかも地域に大きな総合病院が存在するかのよう努める。』この考えは安里会長に引き継がれたが、田名会長はじめ新役員の先生方にも是非とも引き継いでいただきたいと強くお願いしたい。

今後、沖縄県医師会は田名毅会長を先頭に運営される。新理事会の先生方には今後とも県医師会の伝統を踏まえ、県民の命を守るため頑張ってください。また今後とも公立沖縄北部医療センターへの力強い支援を是非ともお願いしたい。

